

学会参加印象記

靱内 裕子



第一会場におけるオープニングセレモニー

6月27日—7月1日、サンクトペテルブルグ大学東洋学部主催による国際学会”ISSUES OF FAR EASTERN LITERATURES” —dedicated to the 120th anniversary of Guo Moruo に参加してきた。口頭発表者が約80人、論文のみの参加者も含めると135人にも上る大規模な学会で、受付ではさっそく400頁を超える厚い冊子3冊分ものペーパー集を配布された。発表は以下の5つのパネルに分類された。

Panel 1 “The Achievements of Guo Moruo and his Contribution to World Culture”

Panel 2 “The Trends in Chinese Literature of XX and XXI centuries”

Panel 3 “New Tasks in the Study of Classical Chinese Literature in the Age of Globalization and Informatization”

Panel 4 “Far Eastern Literatures in Russia & Russian Literature in the Far Eastern & South-East Asian Countries: Translation, Perception and Interference”

Panel 5 “Literatures of Far East & South East Asia: Past and Present”

学会の名称にもあるように生誕120年の郭沫若がメインテーマとなっており、Panel 1-3が中国文学関係の研究にあてられ、約50名の発表者が参加した。Panel 4-5は極東・東南アジアが主要テーマに据えられ、32名が発表した。ペテルブルグ在住の研究者以外はほぼ全員が主催者の手配によるAzimut Hotelに宿泊し、学会も同じホテルの会議室を利用した。学会の計画が公表された当初は発表会場としてサンクトペテルブルグ大学が予定されていたが、ホテルが収容人数不足から変更され、それに伴い発表会場もホテル会議室へと移行された。サンクトペテルブルグ大学を訪問できなかったのは残念でもあったが、会場と宿泊が同一ホテルになったことで移動の手間が省けた上、発表者同士や事務局との連絡にも便利であり、参加者には好評であった。

発表会場はPanel 1-3が第一会場、Panel 4-5が第二会場となったが、同じホテル内でも別棟の会議室でかなり遠い上に、Panel 1-3では発表言語に中国語が多く使用されていたため、Panel 4に分類されている筆者は第二会場の発表のみを聞いた。以下にその発表の様子を記す。



第二会場フロアの様子

第二会場では、ロシア人研究者 20 人に加え、ウクライナ、ブルガリア、中国、アメリカ、日本から 12 人が参加した。使用言語はロシア語および英語。日本人は筆者一人であった（第一会場には三人の日本人研究者が参加）。Panel 4 はテーマがロシアを含む比較文学に設定されていたが、比較対象として取り上げられたのはベトナム、中国、満州、日本で、筆者は「仏教説話『カルマ』とキリスト教伝説 —ポール・ケイラス、トルス

トイおよび芥川龍之介—」という題目で発表を行った。Panel 5 の極東・東南アジア文学研究で取り上げられたのは日本文学、中国文学、モンゴル文学、韓国文学、ビルマ文学、ベトナム文学、インドネシア文学、チベット文学であった。中でも日本文学をとりあげた発表が第二会場全体で 14 本と最も多かった。その内訳を見てみると、万葉集、百人一首、藤原基俊、愚管抄、志賀直哉、三島由紀夫、桐野夏生、チェーホフ演劇、民話、宣教師ニコライ、日本におけるリアリズム、社会的孤立などがテーマとして取り上げられている。上代から現代まで様々な角度から日本文学が研究されており、日本文学への関心の高さがうかがわれた。

各発表についての感想は差し控えるが、発表の後で交わされる活発な議論は非常に刺激的であった。フロアに日本人は筆者一人だったわけであるが、日本文学を論じる外国人研究者の発表に新たな視点を発見することもあれば、違和感を持つこともあった。そういった小さな違和感をすぐに論じあえることに、顔をつきあわせて発表を行う国際学会の最大の意義があったと思う。ひとつだけ例を挙げたい。桐野夏生の小説「Out」をブルガリアの研究者は「“Out of order” から“Way to freedom” へ」という図式で分析していた。しかし筆者が初めて「Out」という題名の小説を手にした時、「セーフ」の対局にある「アウト」を無意識に思い浮かべていた。実際に読み進めた時も「いつ主人公らの犯罪が暴露され、もくろみがアウトになるのか」という緊張感を持っていた。読み進めるに従い、「Out」が「アウト=失敗」の意味だけでなく、「辺境の地」も示せば「階級からの脱出」も示すという多層構造に気づくのであるが、野球に縁のない研究者には日常語としての「アウト」がそもそも存在していない。よって立つ文化の違いで読み解き方の第一歩が違うことを確認し合い、さらに活発な議論へと発展した。

議論は夜の部へと続いた。主催者がナイトツアーやレストランでの会食などを提供してくれ、日中はほとんど顔を合わせない第一会場と第二会場の研究者同士で交流する場を持

つことができた。さらにホテルに戻ってからも誰かの部屋に集まって飲みながら語り合い、楽しいひとときを過ごした。



筆者の発表

また論文を通してのやりとりより遙かにスピーディーに、そしてより細やかに意見を交換でき、期待以上の収穫を得ることができた。非常勤講師にとっては国際学会に参加することは容易なことではないが、助成制度によって後押ししていただけることは大変ありがたい。ここに日本ロシア文学会の皆さんに対する謝意を表したい。

さらにぜひ特筆しておきたいことは、多くの研究者から東日本大震災へのお見舞いの言葉を頂戴したことである。日本に住んだことのある方もそうでない方も日本に心を寄せ、復興を信じていると言って下さった。この場を借りて皆さんにお伝えしたい。

この度の国際学会参加に際し、日本ロシア文学会国際交流助成金を交付していただくことになった。学会に参加したことにより、国内の活動だけでは得られない人脈を築くことができ、ま

(もみうち ゆうこ、早稲田大学)